

連載 第16回 『試聴室探訪記』

～谷口ともりの、魅惑のパノラマ写真の世界～

「金沢蓄音器館」を訪ねて

フォトグラファー 谷口 ともり・編集委員 森 芳久



1F



3F

第16回試聴室探訪記では、昨年12月6日「音の日」に「音の匠特別功労賞」を受賞された、八日市屋典之氏が館長を務められている「金沢蓄音器館」に伺いました。金沢蓄音器館につきましては、本号10ページに「音の日」に行われた八日市屋氏の講演内容の記事をご参照ください。

今回パノラマでご紹介するのは、1Fの多目的ホールと3F蓄音器コレクション展示コーナーです。

多目的ホールには、米国メイソン&ハムリン社の自動再演グランドピアノ「アンビコ タイプA」(1927年製)が置かれています。日本に50台程しか存在せず、また完動品は非常に少ない貴重品です。これに用いるピアノロールも約2,000本(2,000曲)収集されているとのことですが、紙製のためにロールの両端が破れ易く、毎日曜日のみ1日3回の限られた実演が行われています。

またホール正面には、蓄音器の名機と賞されるビクトローラの VV8-30「クレデンザ」が、左に英国 E.M.G.製「エキスパート・ジュニア」、右に英国 HMV 製「モデル 157」を従えて設置され、ここでは定期的にこれら蓄音器によるレコード演奏会が行われています。

さらにここには多くの貴重な蓄音器が並べられ、フロアー中ほどにも正面の「クレデンザ」と同じ外観のものが置かれていますが、こちらはターンテーブルを電気モーターで駆動する後期のモデルで、型番も VV8-30X と区別されています。

正面の「クレデンザ」の前で貴重な SP のコレクションを手に入れているのは、金沢蓄音器館館長の八日市屋典之氏です。バックに流れている曲は、日本で初めて国際的バイオリニストとして活躍した諏訪根自子が演奏する「ドリゴのセレナーデ」です。

3F の蓄音器コレクション展示コーナーでは、蓄音器の歴史とメカニズムなどを紹介、明治時代、大正時代、昭和初期の蓄音器の歴史が一望できます。ここでのバックに流れている曲はバイオリンの名手であり作曲家でもあった、フリッツ・クライスラーの自作自演の「美しきローズマリン」。同館の 2F の聴き比べコーナーに設置された米ブランズウィック社製「バレンシア」による再生音です。

今回も、谷口さんのフォトマジックと歴史を重ねた蓄音器の懐かしい音で、しばし佳き時代へのタイムスリップをお楽しみください。



金沢蓄音器館外観

(注) 日本オーディオ協会では通常「蓄音機」と表記しておりますが、金沢蓄音器館では「蓄音器」と表記されていますので、ここでは蓄音器という表記に統一いたしました。

パノラマ画像の操作説明

- パノラマ写真は、はじめのページの[試聴室画像](#)をクリックしてご覧ください。
(ローディングに若干時間がかかる場合があります。)
- マウス操作で、画面を上下・左右 360 度、自在に回転してご覧いただけます。
- 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。

+	画面のズームイン	↑	画面の上方向への移動
-	画面のズームアウト	↓	画面の下方向への移動
←	画面の左移動		
→	画面の右移動		